

相対性と客観性の狭間で
——ディルタイのニーチェ批判に導かれて——

香川大学 入江祐加

19世紀の哲学者、ヴィルヘルム・ディルタイは、表現や解釈、客観的精神など、自分と自分以外のものとの絶えざる交渉、そこから生み出る創造性のなかに人文科学・社会科学（いわゆる精神科学）の構築のあり方をみる。そこでディルタイはハンス＝ゲオルグ＝ガダマーが指摘したように「相対性のなかで客観性がいかにして可能か」という問いを追求する。ディルタイの精神科学の基礎づけにおいて、社会や人間の生活における個々の相対的なものの運動が未来を形成していくための力となることが先行研究（具体的には20世紀のローディやボルノーの著作）でも指摘されてきた。こうした考え方は同時代の思想家ニーチェへの批判のなかでさらに磨かれてきた。

ディルタイおよびニーチェはともに晩年に相対主義の傾向を強めた思想家として記述される。しかし両者において、相対化の過程を経て再建された哲学は、最終的にそれぞれの世界観は相対的であるということを示すのではない。それはいかなることを意味するのか。ニーチェは大衆が自身から偉大なものを生み、混沌が自身から秩序を生むことを否定する。ニーチェは個人の目的を文化の発展から切り離す。ニーチェは歴史を認識するうえで鍵となる偉人を大衆と対立させ、文化の発展から切り離す。彼は人間自身の視点のなかでどこか別の視点を設定し、同じ等級のものを同じ等級でありながら裁く人間を要請する。

一方でディルタイは、ニーチェが否定する大衆こそが文化や社会の価値を高めることに寄与すると考える。彼は個人が関与する特別な出来事よりも、文化の歴史が現実を産み出すと考える。体験された内容は大衆のなかで存続し、そこで体験された内容は一人の人間では率いることのできない変容の過程を現実化する。それは歴史の限界についての「見本」を指し示すのであり、超越論的な主張は自己と世界の関係のダイナミズムの領野のなかに入れ替えられなければならない。ディルタイにおいて文化や社会が形成されるのは人間同士の関係性においてである。それらの価値は、ここまででみたように、人間そのものの言語、風習、生の形式、生活様式、人間の歴史や社会の遺産、文化の表現が遷移する歴史のなかで具現化される。

重要なことは、ディルタイが個々の相対的な人間の観察を重要視しており、そこで考察される客観的な認識のあり方が人間の環境や身の回りの他者に対する連関のなかにおかれていることである。人間はそれぞれの外部にある計り知れない社会や歴史の深みを経由し、「人間とは何であるか」という問いに立ち返る。そこから精神科学の真の認識のあり方が現れるとディルタイは考えるのである。人間は自らの意志を相互に伝達したり、自己を開き合ったり、自分の経験を共有したりしながら、人間の理解を追って（nach）深めている。人文科学・社会科学の構築において、こうした「相対的な客観性」を規定するディルタイ及びディルタイの真理観を精査することは、哲学的真理の新たな地平を切り開く上で大きな意味があるだろう。本稿は相対的とも客観的とも受け取れるディルタイの真理観を考察することで、ディルタイ哲学の終着点として現れる「哲学の哲学」の概念を明らかにしたい。